

02・学校の地下書庫で、不思議なおまじないの本を見つける

〈シチュエーション〉

主人公、小枝、まゆかが学校の図書館で過ごすシチュエーション。
三連休の最終日。

主人公は学校で勉強しており、そこへ小枝とまゆかが迎えにやって来る。
地下書庫にいた主人公を、小枝とまゆかが見つけたところからスタート。

場所移動は、小枝とまゆかが上階から降りてくる。主人公が勉強していた机の付近で会話し、また上階へと戻る。という流れ。

SE1 図書館の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【トラック08のSE1と同じ音】

【トラック08とは開始位置を変えて流す】

【0—5秒ほど流してSE2】

SE2 主人公が本をめくる音

【最初から最後まで流す】

【3回繰り返して流す】

【1回流すごとに8秒おき、それを3回目まで繰り返す】

SE3 小枝とまゆかの足音

【最初から最後まで流す】

【2回繰り返して流す】

【同じSEを二つ、少しタイミングをずらして同時に流す】

【10メートル以上離れた場所から、だんだん近づいてくる】

【SE3が残り1秒ほどになったタイミングで『小枝』のセリフ】

〈主人公〉

「……………」

主人公、学校の図書館内、地下書庫の机に座っている。

ここで勉強をしていたのだが、ちよつと飽きてきて、本を眺めていたのだ。手を取っているのは、勉強とはまるで無関係の本。

『魔女……の魔法書』と書かれた、奇妙な、というか、随分と怪しげな本である。

『魔女』の後には名前が書かれているのだろうが、頭文字が『M』である事以外はよくわからない。

それでもなぜか惹かれ、パラパラめくっていると、そこへ、友人の『小南 小枝（こなみ こえだ）』と『聖園 まゆか（きよぞの まゆか）』がやってくる。

△ボイス加工あり▽

■だんだん近づいてくる

■1メートルほど離れた距離

〈小枝〉

■まゆかとともに、主人公を探して、上階から、階段を使って降りてくる。

最初は見つけられず、きよろきよろしているが、発見するとともにだんだん近づいてきて、主人公に声をかける

「『『ようやく見つけた』という感じで』
おー。おったおった」

〈主人公〉

「……あ！」

△ボイス加工あり▽

■ 1メートルほど離れた距離

〈まゆか〉

■ 小枝とともに、主人公を探して、上階から、階段を使って降りてくる。

小枝の後についていく感じで、発見するとともにだんだん近づいてくる。
そして、主人公に声をかける

「【穏やかで、にこやかな、余裕のある感じで】

お疲れ様です。こちらにいらっしゃったのですね」

〈主人公〉

「小枝ちゃん、まゆかちゃん……！ 二人とも部活、終わったの？」

△ボイス加工あり▽

■ 正面50センチ 以後次の指示があるまでこの距離で固定する

〈小枝〉

■ まゆかとともに、主人公が勉強している机の前まで行って、止まる。

そして会話を始め、まずは今がすでに閉館時間である事を伝える

「【ちよつと呆れつつも、優しく。

『もう閉館時間である事に気づかない位熱心に勉強していたのか』という感じで」
せやねん。もううちの部活もおしまいの時間。

つか、閉館時間やで？」

〈主人公〉

「えっ……！ もう、そんな時間？」

△ボイス加工あり▽

■ 正面50センチ 以後次の指示があるまでこの距離で固定する

〈まゆか〉

■ 小枝とともに、主人公が勉強している机の前まで行って、止まる。

そして会話を始め、まずは今がすでに閉館時間である事を伝える

「【穏やかで、主人公への好意がにじみ出ている感じで」

ふふ。やはりお気づきでなかったのですね。

貴方らしいです」

〈小枝〉

「ちよつと呆れつつも、優しく。」

『ちよつと頑張りすぎなのは心配だけだね』という感じで

ほんまになあ。あんたって、一回集中したら帰ってこーへんねもん。
うちらが声かけへんかったら、ずっとここにおったんやない？」

〈主人公〉

「あはは……」

〈まゆか〉

■主人公が手にしている本が、図書館のものらしいと気づいて。

借りるつもりなら急いだほうがいいと勧める

「【優しくすすめる。『そちらの本Ⅱ主人公が今手にしている本』】

ふふふ。貴方の集中力には、目を瞠（みは）るものがありますものね。

ですが、そちらの本を借りるのでしたら、そろそろ行かなくてはなりませんわ。
貸出手続き終了まで、あと十分程になりますもの」

〈主人公〉

「えっ？」

△ボイス加工あり▽

■近づく 正面30センチ 以後次の指示があるまでこの距離で固定する

〈まゆか〉

「【優しく、にこやかに。自分の発言を補足する】

ええ。今手にされているそちらの本です。

何（なん）だかとても熱心に眺めているようでしたから、てっきり借りられるのかと」

△ボイス加工あり▽

■近づく 正面30センチ 以後次の指示があるまでこの距離で固定する

〈小枝〉

「【にやにやと優しくからかうように。『あそこの階段Ⅱ小枝とまゆかが降りてきた階段』せやせや。

うちら、あそこの階段んところから手え振ったのに。

あんた、全然気づかへんねもん。

『よっぽどおもしろい本読んどるんやろね』って話しとったんよ」

〈主人公〉

「わあ……！　そうだったんだね。ほんとごめんね、気づかなくて……！」

〈まゆか〉

「『優しく、にこやかに尋ねる。』どのような本かⅡどんな内容の本か』よろしければ、どのような本かお聞きしても？」

〈主人公〉

「えっと……。おまじ、ない？　の本？」

〈小枝〉

■ 『おまじないの本』についての感想を述べる

「『きよとんとして。あまりにも意外な内容だったので。』

てつきり主人公は、真面目な海外小説でも読んでいるのだろうと思っていたので」
おまじない……？

それはまた、メルヘンなもん読んどるなあ」

〈まゆか〉

■ 『おまじないの本』についての感想を述べる

「『優しく、にこやかに。』

『感動している』意味での『まあ』。

まゆかはこの本に、かなり関心があるので」

まあ……！

確かに少々意外ですけど……思わず手に取ってしまうのもわかります。

【うっとりと】

綺麗な紫の本……私（わたくし）も惹かれます」

〈主人公〉

「まゆかちゃんも読んでみる？」

〈まゆか〉

「『穏やかに、でも嬉しそうに。』

落ち着いてはいるが、かなり興味がある感じで」

あら。では、見せて頂こうかしら」

〈主人公〉

「どうぞ」

主人公、まゆかに本を手渡す。

SE 4 まゆかが本を開いてめくる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

〈小枝〉

■ まゆかが手にした本を、横から覗き込んで

「【意外とノリノリで。なんだかんだで、かなり興味がある感じで】
おっ。うちにも見せてえや。」

■ 本の中身を見て

わっ……中も凝つとるやん。ほんまに綺麗な本やね」

〈主人公〉

「ねっ、綺麗な本でしょう？」

〈まゆか〉

「【穏やかに同意する。】

落ち着いてはいるが、かなり興味がある感じで」

ええ……素敵な本。

これは翻訳版で……原書（げんしよ）は西洋の本、といった所でしょうか。

【主人公に質問する】

今日はこちらのご本を借りるつもりで、地下書庫へいらしたのですか？」

〈主人公〉

「ううん！ 私も初めて見たの。

こんな本初めてだったから、つい魅入っちゃって」

〈小枝〉

「【少し意外そうに。主人公は、知らない本などなさそうなほどの読書家なので】

へえ、たまたま見つけたんかあ。」

図書館員のあんたでも、初めて見る本があるんやなあ。

『本の事知りたいんやったら、あんたかなる先輩に聞け！』って言われとる位やのに」

〈主人公〉

「いやいやいや、なる先輩はともかく、わたしはともそこまではないよ」

〈小枝〉

「【少し思い直して。この図書館の蔵書量は、よく考えると異常なほどなので。

『汐女Ⅱ汐見ヶ原女学院Ⅱ主人公たちの通っている学校』」

……でも、何でもあるもんな、この図書館。

地下書庫なんてうち、汐女に入るまで、ゲームでしか見た事なかったもん。

ここっつてもう、ダンジョンみたいに入り組んどるし！

どんな本でも置いてある気がするわあ」

〈まゆか〉

「【穏やかに同意する】

全く同意です。ですから、このような出会いの機会があるのでしょね」

〈小枝〉

「【楽しげに。だいぶノってきた感じで】

そんなら、この未知の出会いに感謝して、なんか一つ試してみんのはどない？
何か可愛いやつ。

呪い感ない、ポジティブな感じのおまじないやったら、悪さする事もないんとちゃう？」

〈まゆか〉

「【穏やかに同意する。】

落ち着いてはいるが、かなり興味がある感じで】
あら……それは楽しそうです」

SE5 まゆかが本をめくる音

「【最初から最後まで流す】

〈まゆか〉

「この辺りなんて如何（いかが）でしょうか？」

〈小枝〉

「【楽しげに。だいぶノってきた感じで】

おおっ、ええやん！」

〈主人公〉

「もうっ、二人とも、楽しんでるでしょ！」

〈小枝〉

「【きゃっきやと、楽しげに。どう考えても楽しんでいる感じで】

あはは、そんなわけがない。

楽しんどるとちやうんやでう。

……いや、めっちゃ楽しんどるんやけどね？

うちらなりに。うちらなりに真剣に！

あんたの恋、応援したいと思ってんねん！

『『愛しになる先輩にもっとふさわしくなりたい！』って。毎日勉強にスポーツに頑張って張つとるあんたに、神様のなもんのご加護を！』

ってな？

だからおまじないなんて、ほんま丁度ええやんって思っで。

たとえばこの『もっと好きにさせるおまじない』とかなあ……？」

〈主人公〉

「いいよ！　そういうのは！」

〈まゆか〉

「くすくすと楽しそうに」

ふふっ。でも私（わたくし）も、同じ気持ちです。

【少し間をあけてから、少し芝居がかった感じで。

『歴史の目撃者Ⅱ主人公と鳴瀬の運命的な出会いを目撃した者』
……だって私（わたくし）達。『歴史の目撃者』ですもの……♪」

〈主人公〉

「れ、歴史の目撃者って……」

小枝とまゆか、にやにやと楽しそうに顔を見合わせると、一度おまじないの本を閉じる。

SE 6　まゆかが本を閉じる音

【最初から最後まで流す】

それから、芝居がかった口調で、主人公と鳴瀬が交際に至るまでの出来事を語り始める。

〈小枝〉

■まゆかと顔を見合わせた後、二人で、一年前から現在までの、主人公と鳴瀬が交際に至るまでの経緯を語り始める。芝居がかった口調でノリノリ、とても楽しそう

「ノリノリで、芝居がかった口調で」

せや！ ……あれは忘れもせーへん一年前。

受験生のうちとまゆかは、下見も兼ねてこの汐女の学祭にやってきた。
そこについて来てくれとったんが、当時他の学校受けるつもりやったあんたやってん」

〈まゆか〉

■ひとつ前の小枝のセリフを引き継ぐ形で語る。

あまり芝居がかった雰囲気ではなくナチュラルだが、声が弾んでいる
「穏やかに、にっこりこと。」

口調は変わらないが、小枝の芝居がかったノリに自然に合わせている」
ですが、ステージの前を偶然通った事で、事態は急展開。

『あちらで一息つきましようか』。

そう声をかけた私（わたくし）達に、貴方はまるで無反応。
ある一点を見つめたまま、全く動かなくなってしまうわたのです。
その視線の先におられたのが……」

〈小枝〉

■ひとつ前のまゆかのセリフを引き継ぐ形で語る

「『ノリノリで、芝居がかった口調で』

ステージで踊つとる、ダンス部のなる先輩やった……！

その日からあんたは、『わたしも汐女に行く』って、人が変わったみたいに猛勉強。数か月でメキメキ成績を上げ、宣言通りに見事合格。

四月。こちらは三人揃って、汐女の門をくぐった！」

〈まゆか〉

■ひとつ前の小枝のセリフを引き継ぐ形で語る

「『穏やかに、にこにここと。』

口調は変わらないが、小枝の芝居がかったノリに自然に合わせている」

……けれど、件（くだん）の先輩につきましては、お名前さえもわからぬまま。
もし三年生だったのなら、卒業されている可能性さえあります。

彼女の搜索は、困難を極めるかに思えました。
「だけど……！」

〈小枝〉

■二人で声を合わせて

「『小枝はとても芝居がかった口調で。
まゆかは少し芝居がかった口調で』
やけど……！」

■ひとつ前のまゆかのセリフを引き継ぐ形で語る

「『ノリノリで、芝居がかった口調で』

入学式の日、あんたと彼女は再会した。

せや、この図書館で……！」

【『茅島鳴瀬』のアクセントは、関西風に、自然なものにする】

彼女の名前は『茅島 鳴瀬』。

『憧れのダンス部の先輩』は『読書家のあんたと趣味の合う、文学少女のなる先輩』でもあったんや……！」

〈まゆか〉

■ひとつ前の小枝のセリフを引き継ぐ形で語る

「『穏やかに、ここに』こと。」

口調は変わらないが、小枝の芝居がかったノリに自然に合わせている」

そしてお二人は、紆余曲折（うよきよくせつ）ありながらも、少しずつ距離を縮め。貴方の想いは実を結び、七月、めでたくお付き合いを始められました」

〈小枝〉

■ひとつ前のまゆかのセリフを引き継ぐ形で語る

「『ノリノリで、芝居がかった口調で』

今や二人は、ちよっともう鬱陶しい位のラブラブカップル。

そうなるんまでの一部始終を見とったうちとまゆかは、まさしく『歴史の目撃者』と言えるんじゃないです……?!

「『さーっと普段の口調に戻って。』

そのギャップが面白い、という印象になるように」

な？　こんなんて、漫画みたいやん。ワクワクするやん。

『もっと仲良くなれますように』っておまじないもしたくなるうちの気持ち、わかるやろー？」

〈主人公〉

「むうう……。まあ、確かに二人には、本当に感謝してるけど……！」

〈小枝〉

「【きゃっきやと、楽しげに。どう考えても楽しんでいる感じで】

ともかく、こちらは応援してんねん！

【一呼吸おいてから。

少し考え直す感じで。

『ちよつとふざけすぎちゃったかな』と少し反省する感じと『主人公は、おまじないなんてなくても自分の望みを叶える力を持っているから、必要ないか』と思い直すような気持ち

……まあでも、ちよつと野暮やったかもなあ。

合格も、お付き合ひも、全部自分の努力で叶えてきたあんたやもんね。

今更おまじないなんて、要らんかったかもしれへんな」

〈主人公〉

「ううん……」

SE7 主人公が本を開いてめくる音

【最初から最後まで流す】

〈まゆか〉

■主人公が手を伸ばし、おまじないの本を渡してほしそうにしているので、手渡す。そして、本を受け取り、開いた主人公をきょとんと見つめながら

「【少し不思議そうに。主人公が何をしようとしているのかわからないのであら？】」

〈主人公〉

「実は試してみたいおなじないが、一つ、あつて……！」

〈小枝〉

■まゆかと声を合わせて

「【少し驚いて】

はいい？」

〈まゆか〉

■ 小枝と声を合わせて

「【きよとんとして】
え？」

〈主人公〉

「これ……なんだけど……」

〈小枝〉

■ 『主人公が試してみたいおまじない』が気になってしょうがない

「【興味津々な感じで。また、ちよっと明るく冷やかす感じで】

なんやなんや、試してみたいのんって。

どれどれ……。

【意外過ぎて、ポカンとしている感じで】

『好きな人の夢が見られるおまじない？』

〈主人公〉

「ダメ……かな……」

〈小枝〉

■『主人公が試してみたいおまじない』が、意外過ぎてしょうがない。

また、あまりにささやかで可愛らしいので、大笑いしつつも感動している。

『そうだ、これぞ自分たちの主人公だ』と思っている

「【意外過ぎて、思わず二回言ってしまう】

『好きな人の夢が見られるおまじない』……。

【少し間をあけてから。

意外過ぎて少しフリーズしたのち、大爆笑する。

あまりにもささやかなおまじないだったので」

あは……あっはっはっはっは！」

〈主人公〉

「えええっ!? 小枝ちゃん、何で笑うの〜!?」

〈まゆか〉

■『主人公が試してみたいおまじない』が、微笑ましすぎて笑ってしまう。

また、あまりにささやかで可愛らしいので、大笑いしつつも感動している。

『そうだ、これぞ自分たちの主人公だ』と思っている

「主人公の事が微笑ましくて仕方ない感じで。

こらえようとはしているものの、声が笑っている」

あらあらまあまあ、これはこれは……。

「上品に、可愛く笑う。

こらえきれなくなって笑ってしまう。まゆか的には『大爆笑』
ふふっ、ふふふふふっ♪」

〈主人公〉

「ま、まゆかちゃんまで……！　なんで、なんでえ？」

〈小枝〉

■ 大笑いしながらも、太鼓判を押す。

笑ってはいえるものの『もし実際におまじないをするなら、この位のものが丁度いいだろう』と思っているので

「『大笑いしつつも、大賛成して。

『そんな特別な物とかも要らない』おまじないを行う上で、特別なアイテムが必要だったり、特殊な工程を踏む必要はない』」

いやいや、ええよ！ええよ！

あんたらしくてええやん！

よし、これや！これやってみよう！

そない特別なもんとかも要らんみたいやし！

これぞ、あんたにびったりのおまじないやん！」

〈まゆか〉

■大笑いしながらも、主人公の奥ゆかしい人間性に感動している。

また、小枝同様、笑ってはいるものの『もし実際におまじないをするなら、この位のものが丁度いいだろう』と思っているので

「【上品に、可愛く笑いながらも、大賛成して】

折角（せっかく）のおまじないなのですから、もっと大きなお願いをされても良（よ）いでしょくに……本当に奥ゆかしい方ですわね。

でも、貴方のそういった所が、萱島先輩の心を惹きつけたのだと、私（わたくし）は思いますわ」

〈小枝〉

■大笑いしながらも、太鼓判を押す。

笑ってはいるものの『もし実際におまじないをするなら、この位のものが丁度いいだろ

う』と思っているので

「『まゆかの言葉に完全に同意して』

せや！　せや！

【明るく笑いながら、地下書庫からの退室を促す。

ぐずぐずしていると、本当に閉館時刻になってしまうので】

ほな！　そうと決まったら、早よ借りて帰んで！

もう行かんと、ほんまに閉館時刻になってまうわ」

〈まゆか〉

■小枝の言葉に賛同し、地下書庫から去ろうと提案する

「『上品に、可愛く笑いながらも、大賛成して』

ええ、参りましょう！

ふふっ……どのような効き目があるか……今から楽しみですね♪」

SE 8　三人の足音

【最初から最後まで流す】

【2回繰り返し流す】

【同じSEを二つ、少しタイミングをずらして同時に流す】

【だんだんフェードアウトする】

ここでフェードアウトして終了。